

若年性関節リウマチ（全身型）の生活指導指針 に関する研究

福岡大学小児科 小 田 禎 一

1. 日常生活指導の方針

学令期の JRA 患児（全身型）10名について、次の方針で生活指導を行った。

“赤沈、CRP が異常値を示しても、38°C を超える発熱がみられず、関節痛が激しくない場合は、関節可動性の許すかぎり、積極的に運動をすすめる。もし運動後1時間以上にわたって関節痛が増強する場合は、運動量をやや制限する”。

この方針で2年以上観察したところ、全例学業に適應しており、運動が原因と思われる症状の増悪はみられなかった。ステロイド剤を使用している例はない。アスピリンまたはアスピリン+イブプロフェンが多くの例に用いられている。

1例において、発病2年後アスピリンを70mg/kg から30mg/kg に減量したところ、新たな関節炎の出現をみた。しかし、再増量によって短期間に軽快した。この例では、マラソン、登山、長距離歩行等によっても増悪はみられなかった。

従って、以上の指導方針は原則的に妥当なものと考え

られる。

2. ワクチン接種の影響

N・K・昭和43年9月生、男。

昭和53年6月、日本脳炎のワクチン接種の2週間後、高熱と発疹、赤沈促進をきたし、JRA と診断された。約1カ月後、右手関節炎を併った。アスピリン 80 mg/kg/日、イブプロフェン 400 mg/日の投与により2カ月で下熱し、13カ月で赤沈が正常化した。以後服薬を続けながら全く正常な生活をしていましたが、昭和56年5月19日日本脳炎ワクチン接種後、5月24日から発疹、関節痛、6月7日から高熱、赤沈促進をきたし、JRA の再燃と考えられた。アスピリンを90~100 mg/kg/日に増量し、6月26日から高熱はなくなり、9月16日以後赤沈が正常化して現在に至っている。他の9例について調査したが、ワクチン接種と関連した発症例は他になかった。

本例では、2回の発症にいずれも日本脳炎ワクチン接種が先行しており、偶然の一致とは断定しがたい。今後検討を要するものと考えられる。

若年性関節リウマチ患者の心理調査（第2報）

日本大学小児科 大 国 真 彦

東京共済病院小児科 藤 川 敏

〔緒 言〕

小児の膠原病の代表的な疾患である JRA は長い慢性経過をとる症例が多い。その過程では入院を反覆し、関節機能障害、関節の変形などを伴い手術を要する例もある。

当然、学校生活、社会生活も制限されるため疾患によ

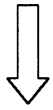
るうつ状態、不安状態、ヒステリーなどの精神症状が潜在し、また出現することが予想される。

本研究の目的はこのような子供たちがどんな心理状態にあるかを調査し、予想される精神障害を予防するための指導方法を検討する。昭和55年の本研究において我々は日大小児科および東京共済病院小児科の JRA 患者お



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 日常生活指導の方針

学令期の JRA 患児(全身型)10 名について、次の方針で生活指導を行った。“赤沈,CRP が異常値を示しても,38 を超える発熱がみられず,関節痛が激しくない場合は,関節可動性の許すかぎり,積極的に運動をすすめる。もし運動後 1 時間以上にわたって関節痛が増強する場合は,運動量をやや制限する”。

この方針で 2 年以上観察したところ,全例学業に適応しており,運動が原因と思われる症状の増悪はみられなかった。ステロイド剤を使用している例はない。アスピリンまたはアスピリン+イブプロフェンが多くの例に用いられている。

1 例において,発病 2 年後アスピリンを 70mg/kg から 30mg/kg に減量したところ,新たな関節炎の出現をみた。しかし,再増量によって短期間に軽快した。この例では,マラソン,登山,長距離歩行等によっても増悪はみられなかった。

従って,以上の指導方針は原則的に妥当なものと考えられる。